

[B年] 聖霊降臨節第12主日(2026年8月9日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 54章1～8節**

1 喜び歌え、不妊の女、子を産まなかった女よ。

歓声をあげ、喜び歌え

産みの苦しみをしたことの無い女よ。

夫に捨てられた女の子供らは

夫ある女の子供らよりも数多くなると

主は言われる。

2 あなたの天幕に場所を広く取り

あなたの住まいの幕を広げ

惜しまず綱を伸ばし、杭を堅く打て。

3 あなたは右に左に増え広がり

あなたの子孫は諸国の民の土地を継ぎ

荒れ果てた町々には再び人が住む。

4 恐れるな、もはや恥を受けることはないから。

うろたえるな、

もはや辱められることはないから。

若いときの恥を忘れよ。

やもめのときの屈辱を再び思い出すな。

5 あなたの造り主があなたの夫となられる。

その御名は万軍の主。

あなたを贖う方、イスラエルの聖なる神

全地の神と呼ばれる方。

6 捨てられて、苦悩する妻を呼ぶように

主はあなたを呼ばれる。

若いときの妻を見放せようかと

あなたの神は言われる。

7 わずかの間、わたしはあなたを捨てたが

深い憐れみをもって

わたしはあなたを引き寄せる。

8 ひととき、激しく怒って顔をあなたから隠したが

とこしえの慈しみをもってあなたを憐れむと

あなたを贖う主は言われる。

【使徒書日課】

エフェソの信徒への手紙 5章21節～6章4節

5 21キリストに対する畏れをもって、互いに仕

え合いなさい。22妻たちよ、主に仕えるように、

自分の夫に仕えなさい。23キリストが教会の頭で

あり、自らその体の救い主であるように、夫は妻

の頭だからです。24また、教会がキリストに仕え

るように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。

25夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のため

に御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。

26キリストがそうなされたのは、言葉を伴う

水の洗いによって、教会を清めて聖なるものとし、

27しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、

聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の

前に立たせるためでした。28そのように夫も、自

分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻

を愛する人は、自分自身を愛しているのです。29

わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえって、キ

リストが教会になされたように、わが身を養い、

いたわるものです。30わたしたちは、キリストの

体の一部なのです。31「それゆえ、人は父と母を

離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。」32

この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会

について述べているのです。33いずれにせよ、あ

なたがたも、それぞれ、妻を自分のように愛しな

さい。妻は夫を敬いなさい。

6 1子供たち、主に結ばれている者として両親

に従いなさい。それは正しいことです。2「父と母

を敬いなさい。」これは約束を伴う最初の掟です。

3「そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く

生きることができる」という約束です。4父親たち、

子供を怒らせてはなりません。主がしつけ諭され

るように、育てなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 10章13～16節

13 イエスに触れていただくために、人々が子供た

ちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。

14 しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに

言われた。「子供たちをわたしのところに来させ

なさい。妨げてはならない。神の国はこのよう

な者たちのものである。15はっきり言うておく。子

供のように神の国を受け入れる人でなければ、決

してそこに入ることはできない。」16そして、子

供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

イザヤ書54章1～8節

1 喜び歌え、子を産まなかった不妊の女よ。

歓声を上げて叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。

夫に捨てられた女の子どもは

夫のある女の子どもより多いからだ

——主の仰せ。

2 あなたの天幕の場所を広くし

住まいの幕を惜しまず広げ

綱を長くし、杭を揺るぎないものとせよ。

3 あなたは右に左に増え広がり

子孫は国々を所有し

荒れ果てた町を人の住む所とする。

4 恐れるな、あなたが恥入ることはない。

恥じるな、あなたが辱められることはない。

あなたは若い時の恥を忘れ

やもめであったときの屈辱を

二度と思い出すことはない。

5 あなたの夫はあなたを造られた方。

その名は万軍の主。

あなたの贖い主はイスラエルの聖なる方で

全地の神と呼ばれている。

6 捨てられて、心を痛めた妻を呼ぶように

主はあなたを呼ばれる。

若い時の妻を見捨てることなどできようか

——あなたの神は言われる。

7 ほんの僅かな間、私はあなたを捨てたが

深い憐れみをもって、あなたを連れ戻す。

8 怒りが溢れ

僅かな間、私顔をあなたから隠したが

とこしえの慈しみをもってあなたを憐れむ

——あなたの贖い主、主は言われる。

エフェソの信徒への手紙5章21節～6章4節

5 ²¹キリストに対する畏れをもって、互いに従いなさい。²²妻たちよ、主に従うように、自分の夫に従いなさい。²³キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。²⁴教会がキリストに従うように、妻もすべてにおいて夫に従いなさい。²⁵夫たちよ、キ

リストが教会を愛し、教会のためにご自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。²⁶キリストがそうなされたのは、言葉と共に水で洗うことによって、教会を清めて聖なるものとし、²⁷染みやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、傷のない、栄光に輝く教会を、ご自分の前に立たせるためでした。²⁸そのように夫も、自分の体のように、妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。²⁹これまで、誰もわが身を憎んだ者はいません。かえって、キリストが教会になされたように、わが身を養い、いたわるものです。³⁰私たちはキリストの体の一部なのです。³¹「こういうわけで、人は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる。」³²この秘義（→神秘）は偉大です。私は、キリストと教会とを指して言っているのです。³³いずれにせよ、あなたがたも、それぞれ、妻を自分のように愛しなさい。妻は夫を敬いなさい。

6 ¹子どもたち、主にあって両親に従いなさい。それは正しいことだからです。²「父と母を敬いなさい。」これは第一の戒めで、次の約束を伴います。³「そうすれば、あなたは幸せになり、地上で長く生きることができる。」⁴父親たち、子どもを怒らせず、主の諭しによって育てなさい。

マルコによる福音書10章13～16節

¹³イエスに触れていただくために、人々が子どもたちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。¹⁴イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子どもたちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。¹⁵よく言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」¹⁶そして、子どもたちを抱き寄せて、手を置いて祝福された。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・8月9日「聖霊降臨節第12主日」の日課主題は「家族」。

・旧約日課は、「イザヤ書」から、主の僕が苦難を受けた後にもたらされる新しい祝福について告げる預言句より。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、互いに仕え合うことを家庭・家族に適用して教える一連の箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスが子供たちを祝福されたことを伝える説話箇所。

旧約日課(イザヤ 54 章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。前8世紀後半の南王国ユダで四代の王に仕えた宮廷預言者イザヤの預言書(預言句集と活動録)として編纂されているが、後半40章以下は、おそらく前6世紀のバビロン捕囚期以降に「預言者イザヤ」を模範とする祭司預言者集団によって語られた預言句が付加されたものと考えられている。この後半部分(40～66章)は、一般に「第二イザヤ」と呼ばれている。

・「第二イザヤ」は、前6世紀中ごろに登場したペルシア王キュロスによってバビロニアが滅亡しユダの民が捕囚から解放された時期(前538年ごろ)を起点に、バビロン捕囚民を中心としたユダヤ帰還事業を巡る政争を背景として告げられた預言句集と考えられる。その前半部には、おそらくバビロン捕囚民の中から立てられて帰還事業を推進するための役割を担った者を指し示す「主の僕」と呼ばれる存在が繰り返し描かれ、最終的にこの「主の僕」が報われない苦難を引き受けて死ぬこと、しかし、そこから神の計画が新たに先に進められて民の帰還と再建が為されるであろうことが希望として語られている。

・日課箇所は、「第二イザヤ」の前半部(40～55章)の終盤に位置する。前章(53章)までで、「主の僕の苦難と死」が描かれており、日課箇所以下は、「主の僕」の出来事が起こった後の時代に始まる(であろう)新しい時代の始まりを、逆説的な希望として告げる内容になっている。

・「贖う」(5節、8節)と訳されているヘブライ語「ガール」は、旧約正典中で広く用いられてる用語(115例)だが、「イザヤ書」中では、もっぱら「第二イザヤ」に偏って多くの用例がみられる(41～63章中で25例)。「ガール」は、「(債務奴隷などを)身請けすること、(借金の形・質草などを)買い戻す」こと、さらには「(親族として)責務を果たす」ことなどの意味で用いられる語。キリスト教神学では「贖罪(罪の贖い)」という用語があるが、旧約正典における「ガール」には「罪を償う」あるいは「赦罪の代価として犠牲をささげる」という文脈での用法は、ほぼ見当たらない。しかしながら、日課箇所については、前章で描かれる「主の僕の苦難と死」の中に見出される「彼は自らを償いの献げ物とした」(53:10)などの記述と結びつけられて、この日課箇所では「罪の贖い」が告げられていると解される場合があり、キリスト教神学における「贖罪」論の重要な基礎づけとされることがある。

使徒書日課(エフェソ5章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第5に置かれた書簡文書。パウロが、コリント伝道後の時期にしばらく拠点として滞在した「エフェソ」の教会共同体に宛てて単名で著わした書簡。現代の聖書学者の中には、パウロ自身の著作であることを否定する者もある。他方で、「コロサイの信徒への手紙」との内容上の高い類似性などが見いだされることから、パウロの著作性を否定することに慎重な立場の者も少なくない。本書簡は、末尾の挨拶で、おそらく本書簡を託された協力者として「ティキコ」なる人物が紹介されている(6:21)。

・日課箇所および後段(6:5～9)は、5:21で提示された「…互いに仕え合いなさい」という教えを、教会共同体ではなく各家庭・家族の関係の間で適用すべきこととして示すために、具体的に夫と妻、父と子、主人と奴隷という関係性を挙げて述べられている。

・本書簡では、前段までで、「キリストの体としての教会」という視座(1:20～23)に基づいて、地域教会にとどまらない、より普遍的な教会観(「公同教会」)の中で、キリスト信者の共同体における一致、またそのための個々の信者の振る舞い方などについての教えが展開されている。日課箇所は、それらの教えの延長線上に「互いに仕え合いなさい」という原則を提示して、これを各家庭・家族という世俗生活の単位にまで適用させるために展開されている。

・背景には、当時のギリシア・ローマ文化やユダヤ社会の慣習に基づいた家族観、また、それに基づく夫婦観、親子観、奴隷観などが、キリスト信者の間でも根強く残っていたことがあるのかもしれない。本書簡では、信者が「滅びに向かっている古い人」を捨てて「神にかたどって造られた新しい人を身に着ける」ことが強く勧められており(4:23～24)、キリスト信者として生きることが振る舞いや生活の刷新を伴うことであるという強い信念が示されている。信者が、教会共同体での公的な生活に比して、家庭・家族という私的領域の生活を二の次にしたり、信仰生活の適用外に置いたりすることは、いつでも起こり得ることである。

・実際には、日課箇所が勧めている内容は、現代的な価値観から見てすべての関係性を対等なものにするような発想には立っていない。むしろ、同時代人として置かれている社会の中で尊重されてきた秩序を、聖書やキリスト信仰の文脈の中に位置づけなおすことに主眼が置かれている。それは、世俗的・私的領域の事柄を教会共同体的な公的領域の中に位置づけなおす試みであり、「信仰」を内面の問題に向かわせるよりも、むしろ対人関係や社会関係という実践の問題に向かわせる視座のあらわれと解され得る。

・5:21,24で「仕える」と訳される「ヒュパタッソー」の原義は「下に置く」(6:7で「主に仕える」と訳される「ドゥーレオー」は「縛られた者となる」)。「従う」(6:1,5)と訳される「ヒュパクウオー」は「聞き従う」。

福音書日課(マルコ 10 章より)

・日課箇所は、弟子たちによって拒まれた子供たちを主イエスが受け入れ、祝福されたことを伝える説話箇所。前段の「離縁についての教え」から始まり、後段の「金持ちの男との対話を巡る教え」に至る一連の教えの中に位置づけられる。日課箇所は「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通に伝えているが、この一連の教えのまとまりについては、「ルカ」が前段を省略した形で伝えている。

・「共観福音書」は、主イエスの二度目の「受難予告」(マタイ 17:22~23、マルコ 9:30~32、ルカ 9:43~45)に続く一連の弟子たちに向けた教え(マルコ 9:33~50)において、すでに「子供の一人を受け入れる」(マルコ 9:37)こと、「…これらの小さな者の一人をつまずかせる者」(同 9:42)となるべきではないことなど、主イエスに従う弟子たちのあるべき対人関係についての指針を示している。日課箇所は、その弟子たちが主イエスに教えられた指針に従って行動できているかどうかを図らずも試された場面として置かれている。弟子たちは、主イエスに触れていただくために子供たちを連れてきた人々を叱り、子供らを遠ざけようとしてしまったことで、主イエスの憤りを招き寄せた。

・「マルコ」は、この説話中で、人々が子供たちのために主イエスに求めたことを「触れていただく」として提示し、それに応えられた主イエスの振る舞いを、「連れて来させ」ること、「抱き上げ」ること、「手を置く」こと、「祝福する」こと、として描いている。「マタイ」は、これらのことを、「手を置いて祈っていただく」こと、「来させる」こと、「手を置く」こととしてのみ描き、「ルカ」もまた、「触れていただく」こと、「来させる」こととしてのみ描いている。

・13 節「触れる」(ハプトマイ)は、「共観福音書」でしばしば用いられる用語だが、ほぼすべての箇所では、病人や障害者に癒しをもたらすための動作行為として描かれている。日課箇所(および「ルカ」の並行箇所)では、人々に連れて来られた「子供たち(乳飲み子)」が癒しの必要な病人・障害者として描かれているわけではない。「マタイ」は、この用語によって病人・障害者の癒しを連想させることを避けるために、人々の求めを「手に置いていただくため」(マタイ 19:13)と描写したのかもしれない。ただし、「手を置く」という表現も、病人の癒しをもたらす行為として描かれることはある(マタイ 9:18、マルコ 5:23、6:5、7:32 など)。「マルコ」は、敢えて病人・障害者の癒しを連想させるこの用語を用いることで、両者を同じ次元で受け入れるべき対象とし、彼らを受け入れるべきこと、さらには彼らのようになるべきことに、主の教えの焦点があったと伝えようとしているのかもしれない。

・16 節「抱き上げ(エナンカリゾマイ)」は、9:36 と同じ用語。16 節「祝福し(カテウロゲオー)」は、広く用例の見られる「祝福する(エウロゲオー)」の強調形で、新約中ではこの箇所の用例のみ。

来週の誕生日 (8 月 9 日~14 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-7「ほめたたえよ、力強き主を」(= I 9 番)は、17 世紀ドイツ改革派牧師で敬虔主義者シュペーナーと交流のあったネアンダーが死の年に発表した詩編 103 編に基づく歌詞。曲は古くからドイツで用いられてきた旋律で、ネアンダーが自作の歌詞のために選んだ。J.S.バッハがカンタータで何度か採用している。
- ・21-371「このこどもたちが」は、アジアキリスト教協議会(CCA)が 1990 年に出版した新しいアジアの讃美歌集に収められた歌詞で、作詞者クラークについての詳細は知られていない。曲は、『讃美歌 21』編纂に際しての公募に対してこの歌詞のために作曲して応募されたもので、作曲者は音楽教室講師で荻教会オルガニストの山中知子。
- ・21-501「主よ、私たちは祈ります」は、『讃美歌 21』編纂のために公募されて収められた日本人の作詞作曲による新しい讃美歌。作詞は中学英語教師であった深沢秋子で、429 番も作詞。
- ・21-541「また会うその日まで」(= II-23)は、465 番(I 405)「神ともにいまして」と同じ原歌詞にヴォーン・ウィリアムズの曲が付けられた讃美歌。英語原歌詞は 19 世紀米国会衆派牧師ランキンが伝道集会のために作詞。米国の野外伝道集会では閉会時に伝道者を見送る歌として多用され、現在でもメソジスト等一部教派で「閉会の歌」として讃美歌集に収められている。

21-7「ほめたたえよ、力強き主を」**Lobe den Herren, den mächtigen König der**

1. Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren! / Meine geliebte Seele, das ist mein Begehren. / Kommet zu Hauf, / Psalter und Harfe wacht auf, / lasset die Musikam hören!
2. Lobe den Herren, der Alles so herrlich regieret, / der dich auf Adels Fittigen sicher geführet, / der dich erhält, / wie es dir selber gefällt; / hast du nicht diese verspüret?
3. Lobe den Herren, der künstlich und fein dich bereitet, / der dir Gesundheit verliehen, dich freundlich geleitet; / in wie viel Noth / hat nicht der gnädige Gott / über dir Flügel gebreitet!
4. Lobe den Herren, der deinen Stand sichtbar gesegnet, / der aus dem Himmel mit Strömen der Liebe regnet, / denke daran, / was der Allmächtige kann, / der dir mit Liebe begegnet!
5. Lobe den Herren, was in mir ist, lobe den Namen! / Alles, was Odem hat, lobe mit Abrahams Saamen; / Er ist dein Licht, / Seele, vergiß es ja nicht, / Lobende schliesse mit Amen!

21-541「また会いその日まで」**God be with you till we meet again**

1. God be with you till we meet again; / by his counsels guide, uphold you, / with his sheep securely fold you; / God be with you till we meet again.

Refrain:

- Till we meet, till we meet, / till we meet at Jesus' feet; / till we meet, till we meet, / God be with you till we meet again.*
2. God be with you till we meet again; / neath his wings securely hide you, / daily manna still provide you; / God be with you till we meet again. (Refrain)
 3. God be with you till we meet again; / when life's perils thick confound you, / put his arms unfailing round you; / God be with you till we meet again. (Refrain)
 4. God be with you till we meet again; / keep love's banner floating o'er you, / smite death's threatening wave before you; / God be with you till we meet again. (Refrain)